

## パネルディスカッション第一部「津波の記憶・記録とミュージアム」

コーディネーター：阪本真由美 人と防災未来センター主任研究員

パネリスト：ラマダニ・バス アチェ津波博物館 館長

熊谷 賢 陸前高田市 海と貝のミュージアム兼陸前高田市立博物館・主任学芸員

橋本裕之 盛岡大学文学部日本文学科教授

**阪本** 津波被災地のミュージアムに関する方々にパネリストとしてお越しいただいています。ここでは、災害に関する記憶、資料の収集、保存、展示を通じた語り継ぎについて、考えていきます。

災害の記憶を保存、継承するための取り組みは多様です。ミュージアムは災害に関する多様な記憶、資料の収集、保存、展示をとおして、たくさんの人に語り継ぐことができる唯一の存在です。また、災害ミュージアムが語ろうとするのは、防災だけではなく、展示をとおして地域の記憶、歴史、そして復興を語る、というものもその活動の一つです。語り継ぐためには、コアとなる展示の資料の保存、収集が大切になります。

被災地にあるミュージアムの方々に、それぞれ、展示を通して何を語ろうとしているのか、展示の工夫、あるいは直面した課題などのお話を伺いたいと思います。



**ラマダニ** 私はアチェ津波博物館の館長です。この博物館は、アチェやインドネシア政府の博物館ではなく、真にグローバルな博物館と感じています。この博物館でインド洋大津波を追体験いただき、世界の人々の津波災害軽減の意識啓発に役立てたいと考えています。

2004年のインド洋大津波では、マグニチュード 9.2 の海底地震によって、インドネシア、スリランカ、インド、タイなどの国が記録的な大津波に見舞われました。死者・行方不明者は 25 万人にのぼり、人類史上まれに見る破壊的な自然災害であり、インドネシアでも過去に類を見ない大災害となりました。

現在、アチェは人々が集い、災害について語り合い、そして学び合う地域に復興してきました。そして、この大災害を乗り越え、災害から得た生きた教訓をもとに、前に進んでいます。これはある意味、姿を変えた祝福と感じています。それまでアチェの地域は長い間紛争がありましたが、災害の後は地域内で一致団結し、復興に向けて動いていきました。政府もインフラ整備などを積極的に行い、経済的にも向上しました。また、環太平洋火山帯の影響を受けやすい危険な地域であるということ、私たちに思い起こさせてくれる契機となりました。

この TeLL-Net の活動は、災害の記憶と情報を集め、収集し、共有していくために欠かせないと感じています。TeLL-Net は生命の大切さを私たちに思い起こさせてくれるのです。現在、私た



ちは、この博物館を TeLL-Net 活動の中心として発展させていきたいと考えています。

このアチェ津波博物館は、アチェの人々の災害における強さと忍耐力の象徴として、災害、宗教、文化の 3 つの哲学的コンセプトに基づいて、各国の援助により設立されました。将来の災害リスク軽減に向けて、世界の人々の意識を高めていく施設になればと考えています。

アチェの津波博物館には、事象としての津波、宗教的価値、文化的価値という 3 つの哲学的な概念があります。上から見ると津波の形をしており、訪れる人々が 7 年前の津波のことを想起するようなデザインになっています。イスラム教の万能の神と人間、人と人とのつながり、津波のときの人の助け合い、愛、信愛、そして、アチェの文化的価値という意味も持っています。

津波博物館は、恐れ空間、悲しみ空間、救い空間という 3 つのスペースを設置しています。最初の恐れ空間では、津波の恐怖を味わいます。次の悲しみ空間では、映像や壁一面に貼られた犠牲者の名前などを通して、悲しみの情景等を追体験します。最後の救い空間では、世界各国からもたらされた支援を体験していただき、減災のメッセージを伝える TeLL-Net のような部屋になっています。

さまざまな課題を乗り越えながら、将来の減災に向けて TeLL-Net の活動を強化していきたいと考えています。そのためには、世界からの支援が何よりも大切になりますし、日本を含めた同様の博物館と連携、協力を進めていきたいと考えています。

**熊谷** 報告に入る前に、まず今回の東日本大震災に際して、神戸を初め全国の皆様から本当にたくさんのご支援をいただいたことに対してお礼を申し上げます。

私からは文化財レスキューという視点、建物がなくてもできる博物館活動についての取り組みを紹介します。文化財レスキューは災害の 3 週間後ぐらいから動き出しました。その際に博物館の一室に残されていた置き手紙がありました。「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然、歴史、文化を復元する大事な宝です」と、私たちが考えていることがそのまま書いてありました。最後に市教委と書かれていますが、市の教育委員会も二人しか生き残っていないという被害状況ですので、市民の誰かが書いてくれたのだと思います。これは私たちにとって非常に重い 1 枚だと思っています。

まず、23 年 3 月 11 日、6 分ほど続く非常に大きな揺れがありました。私は陸前高田市役所に避難し、屋上にいたんですが、その足元も濡れてきた。高さ 15 メートルぐらいの波というよりも海が来たという状況でした。今年の 2 月 1 日時点で死者 1,554 名、行方不明者 294 名です。市民の約 1 割、市職員は約 3 分の 1 が亡くなり、完全に行政機能がストップしました。

文化施設は陸前高田市立博物館、陸前高田海と貝のミュージアム、陸前高田市立図書館、埋蔵文化財整理室の 4 館とも壊滅で、職員もほぼ全滅に近く、学芸員で生き残ったのは私だけでした。博物館で約 15 万点、海と貝のミュージアムで 11 万点、埋蔵文化財整理室は回収分でコンテナ 700 箱と土嚢袋 500 袋の資料を収集していました。図書館が 8 万冊。このうち約 31 万点



がレスキューされています。

海と貝のミュージアムは、梁の上にまで展示ケースが乗っかっているという状況でした。

市立博物館は自然史、人文系合わせて約 15 万点の資料を収蔵する総合博物館ですが震災時には、車が 2 台、民家が 2 軒分館内に入っていました。建物の倒壊だけであれば、その場に資料が残っている可能性もありますが、津波によって資料が流出し、回収は困難を極めました。

展示室 1 階は海側にはほとんど窓がありませんので、津波が押し寄せたとき、何とか耐えたようですが、引き波が全てのがれきを持って中に入り、渦を巻いて扉を破って出ていったようです。

がれきをよけると、床面から 50 センチ以上の砂が堆積しており、この中から資料を一点一点掘り出しました。状態の悪い昆虫標本は、ガラスがなくなり、ケースの中に大量の土砂が入っているという状況でした。植物の標本は一点一点ビニール袋に入れていたので、海水の浸入が意外に少なく、レスキューできた資料がかなりありました。

床面に堆積した砂は捨てずに、博物館の裏側にすべて集めておきました。砂をふるいにかけて、かなりの資料を見つけました。

市街地から約 16 キロ離れた、昨年 4 月から閉校になった山手の小学校を使って、保存処理の作業を行っています。当初は、土砂がこびりついた状態の資料を平置きしていくしかありませんでした。

次に、安定化の処理への遠い道のりについてお話しします。三陸の海は本来きれいな水ですので、単なる水害の水損のように水洗いすればいいのですが、今回は真っ黒な水につかってしまいました。まず、除菌をし、次に脱塩をしなければなりません。最低でも水道水レベルまでの脱塩です。そして、乾燥をして本格処理、抜本修理へ回すということになります。約 31 万点の資料について、これらの作業をやらなければならないため、非常に気が遠くなっています。

一次レスキューから二次レスキューにかけて、日本全国の大学、研究機関等々のご支援をいただいています。特に県立博物館を中心とする県内博物館同士のネットワークによって、レスキューがスムーズに進みました。

国立科学博物館で、昨年開催された「恐竜博 2011」の第 2 会場で標本レスキューの現状について扱っていただき、その中で被災資料の展示をしました。それから、遠野市立博物館に陸前高田の子供たちが遠足で遠野に行ったときに、被災した土器の洗浄体験をお願いしています。ふるさとの宝が残っていたことを実感し、自分たちの手で町の宝を残すという気持ちを少しでも持ってもらうためです。

ほかにも、移動展示「陸前高田市立博物館の被災状況」を行いました。津波の被害と文化財を残すことの意味をテーマに出前博物館も被災後に復活させました。

今の段階では被災資料の収集や展示ということはあまり考えておらず、どこが何を持っているのかを把握し、私たちがやるべきものについては収集していこうと考えています。

文化財が残らない復興は本当の復興ではありません。陸前高田のアイデンティティは、この資料の中にすべて含まれています。人命と文化財は両輪です。

被災事実を盛り込んだ展示構想については、ただ単に博物館を建てればよいというものではないと思います。我々には被災した事実もありますし、三陸の海によって今まで享受してきた豊かな文化というものがあります。ありがたい海だけでも、怖い海だということを伝えていきたいと考えています。

**橋本** 今日、災害を忘れない方法ということで、三沢市歴史民俗資料館で私が関わった展示についてご説明いたします。この展示が実現した背景は幾つかございます。まず、三沢市は比較的被害が軽微であるということです。セシウムも検出されなかったのも、このような展示ができました。周辺の領域だからこそ、災害直後に日本初の東日本大震災を扱った展示ができたと考えています。

私は三沢市歴史民俗資料館活性化事業検討委員会で、博物館再生を請け負っていました。観光に関する展示を考えていましたが、この震災で、博物館の社会的ミッションとして災害の展示を絶対やらなければと考えました。

三沢の浜の被災状況を見て、話をしているうちに、「地震海鳴りほら津浪」という記念碑があるということがわかりました。青森県の沿岸部に、昭和8年の大津波の後、三沢市、八戸や階上などの高台に作られました。しかし、ビニールシートで覆われてぼろぼろになっていて、これが何なのか、住んでいる人もわからないというのが現実でした。展示の初期にはこの記念碑を作り、企画延長後は展示を通してこの災害の記憶を伝えていくことに挑戦しようと思いました。

展示は漁業協同組合との共同開催にし、漁業振興、三沢の漁業頑張れというメッセージを込めました。

建物に入ると、ボランティアの方たちがダンボールで作った記念碑があります。

展示室の入り口は、漁業振興という未来を描けるように、大漁旗を幕にしました。この展示は暗い展示です。懐中電灯で照らすようにしています。展示室ではなく、会議室を使っているので空間のデザインをアートディレクションとして加えました。壁面に浜から拾ったイカ箱をはりつけています。手前がれきが置き、その中にテレビがあり、この中で映像が上映されてるという仕掛けをつくりました。がれきを使っているのも、この展示は、ごみと潮の異様な臭いです。博物館ではやってはいけないことです。実際虫はいます。将来どこかに展示を持って行くときには、薫蒸しなければ大変な問題になります。

そのほかには、「地震海鳴りほら津浪、そのとき私は」というメッセージを掲げました。三沢からのメッセージと、三沢へのメッセージを書いていただくようにしました。それぞれのメッセージがやりとりをすること自体が展示になっていて、大きな意味を持っています。メッセージには、「頑張れ東北」とか、「絆」とかという、いわば紋切り型のディスコースもあれば、「ハリウッド映画みたいで、すげかった」という不謹慎なものもあります。これが現実です。率直ないろんな声があって、これを共有していくことを考えました。

昭和8年の津波に関する現地に残っていた資料も展示しました。文化財的な価値があるものと言えるでしょう。常設展示にも、「今から80年前にも津波が三沢を襲ったって本当なの」という

ものを置いて、常設展示との関連性もつけました。

実はこの展示には、さまざまな問題があります。この展示は、3月11日で撤去、廃棄が決まったようです。全国からお客さんが来過ぎて、この場所を残してほしいという意見がすごく出てきました。当然そういうミッションがあると思います。この展示は50年後、100年後の子供たちにとってこそ意味のある展示だと思うのですが、やはり市役所や指定管理者の考えがあって、私はもう任期が終わってしまい、発言する権利がありません。ぜひこれを残してほしい。例えば、人防や東京や大阪の大きな博物館で、こういうものを引き取っていただくことができないだろうか。巨額のお金を使ってがれきの模型をつくらなくても、本物があります。今回の展示で私たちがレスキューをしたものを、今度は皆さんにレスキューしていただきたいというのが一番訴えたいことです。

**阪本** ラマダニさんと橋本先生には、展示を設置するまでの話のご苦労をいろいろ話していただきました。特に、ラマダニさんは、一昨年の TeLL-Net フォーラムで博物館をつくるという案はあるけれども、開館できずにいるという話をされていました。その後、博物館設置に至るまでどのような取り組みをなされたのか、教えていただきたいと思います。

**ラマダニ** 私たちは支援によって、博物館をつくり、展示をつくり、開館できるようになりました。非常に感謝の気持ちを持っています。資金の調達という難しい問題を抱えながらも、私たちは創造的に革新的に取り組んでいます。例えば、自分たちでジオラマをつくったり、あるいは TeLL-Net での活動を紹介したり、地域の人々を巻き込みながら、地域の祭りを紹介する。あるいは、コンテストを行ったり、展示を行ったりしています。また、口承で伝えるような取り組みとともに、若い学生たちを巻き込んで、スピーチや随筆のコンテストなども行っています。

そして、私たちの住んでいる地域は、自然災害に遭う危険性の高い地域です。常に準備をし、また若い世代に対して、心の準備しておくようにということを伝えていかなければならないわけです。そのためには、もちろん、私たちの博物館での展示とともに、TeLL-Net のプログラムの活動なども効果的に使っていきたいと考えています。

そして、そういったものによりまして、この先、私たちの展示を通して、色々なことを学んでいただく、教育の場を提供できればと考えています。

**阪本** 橋本先生のつくられた三沢の展示は、手づくり感に満ちあふれていると同時に五感に訴えるという非常にユニークな取り組みをされていますが、展示をつくられたきっかけや、あるいは展示において工夫されたこと、苦労されたことがあれば教えてください。

**橋本** 博物館の使命は、こういう記憶を次世代、次の子供、知らない人にも体験できるように伝えていくということだろうと考えます。博物館というのはそういう役割を果たせるだろうと強く思いました。お金がないので、実際にあるものを拾ってきたわけですね。感覚に訴えるということを考えま



した。暗さ、懐中電灯を使う、ごみのにおい、潮のにおいということを通して、ああ、あのとき懐中電灯を使ったよねというふうに思い出せる、暗くて怖かったなとか、寒かった、ということが個人的な関連性、パーソナル・アタッチメントを通して、頭で理解できるんじゃないくて、感覚的に体感できる展示を考えました。難しい問題というのは、やはり虫の問題ですが、それは振り切りました。

**阪本** 災害博物館では遺物の保存、展示を行っていますが、この難しさは、やはり熊谷さんと橋本先生が一番よくご存じではないかと思います。熊谷さんは陸前高田の博物館の資料が全部被災してしまった中で、資料の復旧に取りかかっていると思いますが、どういう思いで取り組まれているのか、教えていただけますか。

**熊谷** 私の場合、陸前高田で生まれ育ち、高校時代から博物館に出入りし、卒論も博物館実習もやって、非常に博物館に思い入れがあり、ある意味、博物館に育てられたという部分があります。博物館の背中側、海側に面している部分は何が当たったのかわからない、すごい傷があるんですよ。あれを見ると、ああ、この博物館は、一生懸命、押し寄せてくる波に耐えて、多少は流出してしまった資料もあるけれども、高田の宝物を守ってくれたんだなと思いました。それを何とかして残そうと。資料の回収率は7割、8割くらいのはずです。しかし、回収できてもすべてを展示できる状態まで戻せないという部分があります。これからは回収率をどれだけ復元率まで近づけられるかが勝負だと思っています。

**阪本** 次に、災害遺物を資料として展示するにあたり、留意しなければいけないことや、その取り組みの難しさについて、お伺いしたいと思います。

**熊谷** 東京の方で遠野の博物館が展示をしています。そのときも資料を出すべきかどうか、かなり迷いました。それはカビの問題があります。膨大な古い教科書や漫画資料などを閉校した小学校に運び入れたときには、とにかく乾燥させるために扇風機とかで風を送ったりしたのですが、紙の資料はどんどんかびてしまう。紙の資料があると汚損源になってしまうので、他の資料と同居させられません。文化庁の文化財レスキューの救援委員会をお願いをして、段ボール600箱近くの紙の資料はすべて、冷凍庫で冷凍保存していただいています。その間に校舎内をきれいにして、処理できる状態になった段階で除菌をする。博物館資料にとって一番怖いのはカビあるいは虫害ですが、今回の場合、資料の海水損ということで、処理方法はおそらく世界で初めての事例になります。保存科学の先生たちも保護法が確立されていないというところで非常に難しい問題を抱えていると思います。

**橋本** 三沢の資料館には日本中から来てくださっていて、非常に高い評価もいただきました。その一方で、批判もありますので、耳を傾けないといけないと思います。例えば福島放射能のエリアから来て、福島では起こっていることの現実が全然明らかにされていない。だから、震災でどん

なことが起こったのかを説明するのは大きな意義があるからすばらしい展示だと言ってくださったご夫婦がいらっやって。その後に宮城からの来館者は、隣の寺山修司記念館で非日常の幻想ワールドで遊ぼうと思ったのに、すごいものを見せられてしまった。まるで墓石のお花を生け花に使っているような感じがする、と言われました。見せ物化しているじゃないかというコメントがありました。それは真摯に受けとめないといけません。そういうコメントがあったら、直して続けていくのが博物館活動です。展示の目的を説明するパネルを新たにつけ加えました。

もう一つは、こういう展示をやる場合に、一方的に被災地を本当に対象化して見せ物のように展示することの難しさです。そう見えてしまうということですね。だから漁業協同組合との共催というスタンスを最初から考えました。これは漁協の方たちも実際に漁業を復活させたいというお気持ちがあったので、地域を展示するのではなくて、地域とともに展示をしていくというスタンスを維持することを考えました。

ただ、こういうことの最大の問題というのは、やはりこの「地震海鳴りほら津波」の記念碑がそうであるように、60年、80年は生き延びない。この展示は生き延びるのかどうかということです。3月11日で終わってしまったら、やめたら終わりです。なので私は地元の学校の空き教室なんかでこれを移せないかってなことで、PTAから呼ばれたので、そういうところでも講演をして呼びかけました。

しかし、先ほどお話ししたように、指定管理者制度もあって、市もこれはごみなので清掃局に早く連絡したいという話になっています。非常に耐えられない気持ちもありますが、これが現実です。そのため、こういう展示をどういうふう維持していくかという、ことが、僕の一番の悩みです。

**阪本** 災害の博物館をつくるときには、資料がなくなっているというのが現状ですが、せつかくの資料を何とか生かす方法を考えていきたいと思います。

TeLL-Net では、これまで被災地の遺物の保存、収集について、ずっと働きかけてきました。今回の東日本大震災を受けて、その後のさまざまな展示をめぐる動きを見ていると、展示資料の収集、保存、またその展示の仕方、地域との連携の仕方、こういう課題についても、これから先取り組んでいく必要があると思います。また、陸前高田市立博物館の場合は、博物館自体が被災すると、その後の復旧、復興がどれだけ大変なものかという、大きな問題を私たちに提示しています。この点についても、これから先、引き続き取り組んでいきたいと思います。